

市大山岳会ニュース

OcuacNews

1996.11.1

No.20

双六谷～里郊垂越～赤木川

1996/8/11～8/14 高尾 裕（単独）

一週間の暇を得たのにどこに登るあてもなく、仕方なく地図を引っ張り出せば、大きくうねる青い水線に目が止まった。双六谷については以前からその存在を知らなかった訳ではない。ただ現役一回生で初めて比良の谷を遡行したとき、見かけとは裏腹などろどろの草付と、ぬめぬめの岩にアレルギーを覚えていたのだろう、あれ以来沢らしい沢には一度も入ったことがない。まあ目先を変えてみるにはいい機会か、などと軽い気持ちで準備を始めた。結局、一週間分の食料で膨れ上がったザックを見たら、さすがに後悔し始めたがもう遅い。夜行に飛び乗ったときには、なるようにしかなるまいという気持ちだった。

1日目 金 木戸川沿いの道はトンネルが今にも崩落しそうだというので、車は走れず、入渓点まで延々と歩く羽目になる。いきなり予定外だから、荷も重ければ気も重い。広河原を過ぎ、小倉谷の出合にかかる吊り橋に出るとこれを見送り、軌道跡をたどって行くのだと思い込み前進するが、どうもおかしい。1時間ばかりうろうろしてから林道を引き返すと、軌道跡がくっきり合流していた。最初ここを通ったとき、完璧に見落としていたのだ。やっと到着した入渓点には地図にも載っていない立派な橋が架かっていて、単独行のテントが張ってあった。水勢があまりにもきつく、巨岩の乗り越しも困難なので明日引き返すと言う。

社会人山岳会に入っているが、もっぱら単独で登ることが多いそうだ。いろいろ話しているうちに腰に根が生えツエルトを張った。

2日目 気をつけての言葉に送られ遡行開始。

足に釣具店で買った安売りの溪流たび、そしてソックスを膝までたくしあげ、ヘルメットを被って、即席沢ヤのできあがり。打込谷出合を渡渉。これより本流は階段状の大きなゴーロ帯となり、激流が巨岩を蹴って流れ、至る所に深く蒼い淵をたたえている。ここの左岸は日影十根（ひかげじゅんね）右岸は日面十根（ひおもじゅんね）と呼ぶ高さ200mの岸壁である。コメツガやシラビソなどの濃密な緑に、流れ際までびっしり覆いつくされた薄暗い谷間は、幽谷のイメージをいやがうえにもあおりたてている。のっけから腰から胸までの難儀な渡渉が続くが、それよりもマイホームほどの巨岩の乗り越しには随分苦勞させられる。重荷を背負ってのボルダリングは厳しい。一ヶ所フィックスの垂れ下がった巨岩は、空身で登ってからザイルで荷物を引っ張り上げる。やれやれと言う感じでポケットに手を入れ、ドキッとした。チャックを閉め忘れていたから激流の渡渉で流されてしまったらしく、時計がない。厄介な転石帯での渡渉と、気合一発の飛び石で少し高度を稼いだころ、再び廊下状を呈してきた。どん詰まりの滝に取り付こうと、泳いで滝身に近づくが、他愛もなく吹っ飛ばされる。やむをえず右岸の側壁をよじ登り、

滝の落口に懸垂下降。セنز谷出合、下抜戸の広河原あたりからは日が差し込み、今までのような悲愴感がなくなる。緑色の水をたたえた深く美しい淵にぶつかり、思わず足を止めてしまった。水面には幾重にもさしかけた濃緑の影が鮮やかに映し出され、川床の小石の一粒一粒が確認できる。廊下では、白く磨かれた花崗岩の桶の水が滑り落ち、何段かの白い滝がコバルトブルーの釜を従えて、リズムカルに奔走する。胸をわくわくさせながら、ほとんどをへつりか泳ぎで突破していった。しかしちょっとした高巻で小枝が右目に入り、コンタクトレンズを飛ばされてしまう。調子に乗るとすぐこれだから、たちが悪い。これから左1.5右0.09の奇妙な視界を行くことになる。

またしばらくして、両岸が威圧せんばかりの不気味さで重苦しくのしかかってきた。キンチヂミなどと呼ばれる悪場で、双六谷の核心部へやってきたのだ。左岸の水中にある見事なスタンスを探り当て、10mへつり、詰まった所で岩を越すのだが、背の重荷が身体を引きはがそうとする。落ちたら激流に巻かれてどこまで流されるやろか？と緊張しつつ思案したが、結局これしかあるまいと、チムニー登りの微妙なバランスのままザックを外し、上に押し上げる。ふっと一息ついて岩の上に大の字になり、しばらくは放心状態になっていた。

気がつくやう雲行きが怪しい。もう悪場はないだろうと、たかをくくって先を急ぐと、今までみたこともない巨大なスノーブリッジが出現する。至る所に流木が散乱し、水流をせき止め、ダムを形成している。無駄とは知りつつ左岸をへつってトンネルを窺うと、白煙渦巻く中に、無惨に傷ついた木が林立し、水は轟音を共鳴させて吐き出されてくる。右岸を見上げて合点がいった。黒部五郎岳の稜線に派生する支尾根から、この谷めがけて巨大な雪崩が落ちたのだ。木がなぎ倒され、尾根上まで禿げ上がった山肌がそれを教えている。傍らの流木に妙なものが引っ掛かっていると思ったら、猪の亡骸で、体毛が真っ白に脱色し、首がない。これが奥飛驒の生々しい自然である。とにかく長居は無用。雪崩跡の斜面へ巻き上がり、ブリッジへ下りて横断後、藪こぎならぬた流木こぎで何とか川床に戻った。

谷筋が右にゆるくカーブすると、そこが蓮華谷の出合である。二つの谷を分ける尾根の末端に格好の台地があるので、ねぐらをかまえ、夕餉の支度にかかる。深い谷間は夜の訪れも早く、いつの間にか黒い闇が忍び寄り、辺りの木々もシルエットとなって僕の四肢に絡みついてきた。落日の瞬間は、水のたぎり落ちる音がひぐらしの蟬時雨に乗って咆哮したかと思えば、ふと何事もなかったかのように静寂が舞い降り、谷を包む。調和があまりにも精妙に支配し、理性的な分析など齒が立たず、無数の和音を記すこともできない。それにしてもここの水は、僕の下界の生活と比べて何と生き生きとしていることか。そしてこの雄渾な静寂を、僕はどれほど慕い続けてきたことだろう。

△▽▷△▽△◁▽

3日目 **雨**がツエルトをたたき音で目を覚ます。時間が判らないので明るくなるまで寝ていようと開き直す。本谷を源流まで詰めてからここに帰ってくるつもりだったが、その暇もなさそうだ。昼近くになっても小雨がばらついていて、このまま黒部乗越へ上がることにする。蓮華谷の岩間に落ちる小滝を右に左に遡行し、通称七つ釜に來たとき、思わずその景観に魅入ってしまう。エメラルドに連なる釜の落ち込みからは、無数の真珠の泡沫が沸き上がり、川面いっぱい広がって、左上方には九郎右衛門谷の大滝が黒々とした岸壁を従え、清冽な白布を懸けていた。その九郎右衛門谷に入り、大滝は左の岩場まじりの大崩を登る。先人の登攀跡がはっきりと残っていたから、それにつられてノーザイルで100mほど登るが、上の強烈なブッシュに行く手を遮られる。はめられたと悟り、そのままクライムダウン。正解は滝壺そばのどろどろルンゼだった。すでに一日一回の失敗はご愛敬といったところ。大滝より上はぐんと水量が減り、傾斜が増えて文字どおりの沢登りになる。10m前後の滝が息つく暇なく現れるが、全部おもしろいように直登していける。ぐんぐん

高度を稼いで後ろを振り返ると、笠雲を被った笠ヶ岳がこちらを見据えていた。雨はいつの間にか上がっており、回りの視界が広がってきて、最後の詰めに入ったようだ。さしもの水流もさらさら音を立てる小川と化し、歩くことに飽きてくるころ、ひょっこりテント場に飛び出した。

小屋は縦走路を行き交う人でにぎやかである。皆が口々に話題にしているのは、台風12号の事。今まで遊行にうつつを抜かしていたから、そんなものが近づいているとは知らなかった。しかしここで終わるのは興ざめである。ザックにはまだ嫌になるほどの食料が詰まっているのだ。そそくさと歩き出し、とりあえず五郎沢を下る。夏の陽気がまた戻ってきたようで、ごろごろの岩が白く光りだし、木々の緑がよく映える。祖父、水晶の山並みの下に雲ノ平が静かに横たわり、その懐から黒部の水が誕生しているのかと思えば、気が散って何度も滑って転びそうになった。源流部とはいえ、黒部は五郎沢の穏やかさをかき消すように堂々と横切っている。躊躇なく足は下流へと歩を進めていた。やはりこの水の流れに逆らわないのが自然だろう。向かう先は上の廊下しかないが、時間はたっぷり残されている。道草をくいながら気ままに歩いているうちに、赤木沢出合の直前で夕立に遭う。それにしても赤木沢出合は見事と言うほかない。夕立のおかげでまわりが暗く影を落とし、稜線から漏れ出た一条の西日が赤木沢を伝い、出合の水盤に柿色の絵の具を垂らしたように注いでいた。雨に打たれながら無言で（もっとも話相手はいないが）立ちすくむ。小さな河岸段丘をなした右岸の兎平はとても気持ち良さそうなので、ザックを放り出し座り込んだらもうそれきり動く気はしなかった。その晩は遅くまでラジオの台風情報に耳をすましていた。

4日目 朝から小雨。昼に回復することは知っていたが、明日は確実に台風が直撃するようだ。パッキングを済まして決断を鈍っていたが、行き先をだれにも告げていないことが心に引っ掛かり、撤退を決める。もともと当てのない旅である。一人の人間の勝手な気まぐれなど、黒部は全く気にかけない。赤木沢出合で釣り糸を垂れている人がいた。釣れますかと声をかけたら、ニヤッと笑い、首をふった。赤木沢を登るのは最初から考えてなかったが、その溪流美は撤退の物憂さを辛うじて補ってくれたようだ。赤いナメ滝を一つ一つ越す度に後ろを振り返る。考えてみると、僕の前に急ぐべき目的はなく、僕を後ろから追い立てるものはなにふもない。たったの4日間と短かったのに、記憶を反芻しても幻覚のようにあやふやである。都会では醜いぐらいに過去と未来にすがりつくのに、山ではそんなことはどうでもよくなる。過去に固執せず、未来を焦燥しない。やはり最も安心して信じていられるのは、いまこの瞬間に踏み一步一步の足音のみではなかろうか。☞

ヨーロッパアルプス

モン・ブランよりブライトホルンへ 佐々木惣四郎

7月6日 総勢14名にて日本を出発。シャモニー、ツェルマットでの滞在型アルプスへの10日間の旅の始まりである。モン・ブラン(4,807m)へは、上堂、佐々木、藤村、福山、義井(福山君の友人)の5名が計画し、同時にマッターホルン(4,477m)をも目指したが、7日夜より8、9にかけての大雪の為、果たせぬ夢に終わり、再度目指す夢が残る結果となった。山行記録としては珍しくないの、感想が中心となる事をお許し願いたい。

9日ガイド3人と共に10日の晴天を期待して、ぐづつく天気の中8時前に出発し、レ・ズーシュ、ベルビューを経由して登山電車に乗り換え、出発点のニー・デーグル(2,386m)に9時到着し、ガスの中を出発。

テートルース小屋の中間点までは高度800mであるが、雪が深く、岩尾根に出てからは吹雪で、クラストしており、アイゼン、ハーネスをつけアンザイレン。途中小休止1回で、11時40分頃小屋に着く。小屋の辺りは広く、時たま青空が見えたが、風は依然として強く-10℃位。

次のグーテ小屋(3,817m)は、テートルース小屋よりすぐ上部にあり、高度差約700m。急なクーロアール(岩尾根)が延々と続く。天気の良くないことが重なり、丁度感じとしては、危険はないものの冬の剱岳主稜線の岩場が続くような気がした。ガイド1人に2人がアンザイレンしているので、安心して登れる事、およびクサリ場が小屋直下に、至る所に張られているので、体力さえあれば、厳しいとはいえ、事情が大きく違う。

逆に言えば、クサリがなくて天気が吹雪けば、事故は間違いなく続出すると思われる。いわゆる思っていたより、ずっとヤバイ。福山・義井の両君は、若さ？にまかせて登り、上堂先輩は、日頃の山登りをベースに驚くほどのがんばりを見せつけ、最もトレーニング不足の藤村氏は、成熟した粘りを見せ、かく言う小生は、ノドの調子が悪かったが、久々の冬の気分が無性に嬉しかった。小屋まで3時間半をほとんど休みなしで、夕方5時に着いた。

グーテ小屋よりピークまでは、高度差1,000mで、下降は登山電車の終点であるニー・デーグルまで2,400m。朝3時には出発しないと最終電車に間にあわないが、朝3時はあいにく吹雪。小屋泊まりの約30名全員動けず、朝8時に起床。つまりあと一泊しないと日帰りできず、断念することになる。幸い天気が落ち着いた9時に下降を開始し、晴れ間の広がったテートルース小屋より氷河ルートを下降した。

山行後の印象としては、4,000mを越える山では決してあなどってはならない事、夏とはいえ-10℃より-20℃となり、完全装備が必要である事を再認識させられた。ちなみに、今回の出発前はガイドより装備の点検があり、ありあわせの装備で来たのであるが、種々買い足しての装備で余裕ができた。

7月11日、マッターホルンへ行くため、ヘルンリ小屋へ入る予定であったが、雪がベッタリとつき、ガイド協会が登山禁止を決定していたので断念し、12日ブライトホルン(4,164m)へガイド2名、メンバー5名にて登頂。今回は天気が良かったので問題なかったが、上部はアイゼンがよくきき、天気が悪いと苦勞する広大な雪の斜面であった。頂上からはモンテローザ、リスカムが美しい姿であった。

話は元に戻り、ハイキング組の9名とは、共に行動したり、別れたりの旅であったが、それぞれにそれなりの思い出が残せた旅であった。特筆すべきは、マッターホルンの北面を見てのハイキングで、天気に恵まれ、素晴らしい景色が楽しめ、多くの花々に圧倒された。結局覚えた花の名は、アルペンローザのみであった。

今回はまた工夫して、多くの会員の皆様に、地球の美しさに接してもらおう機会を作りたいと思っています。岡本夫妻も今回参加され、我々が帰国してからもお2ヶ月強スイスに滞在され、青春を謳歌された。昨年も15名にてカナダロッキーに出かけたのですが、6組のご夫妻参加があり、息長く、自然に、山に出かけたいと思えば、このような旅もあっていいと思う。🍀

TOPICSTOPICSTOPICS

朝日新聞7月2日の夕刊に、大橋前会長が紹介されています。ごらんください。

う ちの学園は、浄土宗の信徒らが日露戦争のころにつくった高等家政女学校が始まりです。創立九十周年の記念に、今春、四年制の京都文教大学を開学しました。設立準備で一番悩んだのは、どんな学部、学科を設けるか。大学新設を抑制している文部省に認めてもらわねばならず、すいぶん頭を痛めました。

大橋 秀一郎
家政学園理事長

出会う



おおはし・ひでいちろう 京都市生まれ。1941年森理商店に入り、70年から75年まで森理社長。75年家政学園理事に就任し、常務理事を経て83年6月から理事長。77歳。家政学園は1904年、高等家政女学校として京都市に創立。幼稚園から小・中・高等学校、短大、大学を経営する。大学、短大の所在地は京都府宇治市。

旧友に支えられ、父の「遺産」育てた

こ 日本文化研究センター所長、樋口和彦（同志社大教授）の両氏にお願いし、文部省の審査も無事パスしました。どちらも全国でも珍しい学科だったせい、百千人ずつ計二百四十人の定員に七千七十人も応募があり、競争率は文化人類学科一八・八倍、臨床心理学科四〇・二倍と、予想を上回る好調なスタートになりました。

結局、私の辞任などを条件に銀行や合議大手の支援が決まり、私はオヤジのあとを受けて学園の仕事をするようになりました。生前のオヤジは寄付好きで、「カネは残せないが、仕事だけは残してやる」と言っていました。その通りになりました。

梅田、川喜田両氏の友情には頭が下がりました。私が大阪商大（現大阪市立大学）を出て、オヤジの経営する繊維商社の「蝶理」に入ったのに、二人は三高（京大と別）の世界に進み、中学卒業後は親戚な付き合いは途絶えていました。そんな二人が、昔のよしみだけで何度も会合に足を運び、教授業にも協力してくれたのです。「持つべきは友」と感激しました。

迎

えてくれた学園の空気が温かく、学校経営の方が性に合っていると感じました。両社の社長業は振り返ると「激務」の一語に尽き、あのまま社長を続けていたら、寿命を縮めていたでしょう。今度こそ失敗できない、と懸命に努めてきました。大学開学で報いられ、友人とオヤジに支えられての成果だと感謝しています。

今、時代、学校も社会も閉鎖性を捨て、国際感覚を身につけることが大切です。その点、若い人類学者の先生方が学園に多い刺激を与えてくれると期待しています。次の課題は大学院の設置になります。私の出番はここまで。次を引き継ぐ方が仕事をしやすけい環境を整えておくことが、私の役目と思っています。

（聞き手・高田 邦雄）

山小屋が欲しい

和田城志

霜結ぶ枯葉の山荘白秋を破る
酒精はなつかしき痴情を育み
萎えたるひとつひとつを刈り取る
老いたる合飲木の闇にうごめく花や夢幻
目覚めればけだるい充足
宴の後のあせりが明日を駆ける
私も疲れているし、なおさら君も
囲炉裏の熾火は厚い灰をかぶり、なおも疼く
天窓に冴え渡る残月はもの言わぬ
安楽を強いる空間は測られ、ゆがめられ、費やされる
先取られた望みが定位置に居座って
快楽過剰のプレタポルテを展示する
カミソリのひそむ泥沼には細い丸木橋
渡り終えんかメルヘン山荘
色褪せた冒険をカットグラスに
そそいではあおり、そしてまたあおり
酔って酔えない無垢なひととき
楽しくてむなしくてやがて哀しい
アルピニズムの深淵を垣間みた記憶と日々の自負
肥満した来し方は整形美容の後姿だし、
幸福切符の行く末は足のない道化師
訪れた期待に割り合わぬ別れの朝は
想い出した私のせいなのか、それともこの
小綺麗な可愛い山荘のせいなのか

潤沢の岩小屋のような作意なき所
甘い感傷にひたしたボロぎれの青春は雨宿り
名残の雨雫とローソクの灯の中で
岩登りの狂気に震えたい
風雪の雄叫びと雪洞の静寂の中で
饒舌な沈黙の時と過ごしたい
仲間がいる。狂気が共鳴し、不安を共有する仲間
がいる。
漆黒の虚空にザイルはためらい、
落石は決断する
乳白の魔境にステップはとまどい
雪崩は走る
ひきつった冗談、いとおしい怒号
さらけだした互いの生理
私も生きるし、君も生きる

そうやって攀じたようにも思えるし
そうでなかったようにも思える
何もかも雨にとけ闇にとけ所在なく
しかも震える歓喜が身体を熱くする
絶体絶命を演じた我らの雅気を
やさしく包んでくれた
あの岩小屋のような、雪洞のような

山荘が建設されるのがいつの間にか決まってしまう。たしか準備委員会設立までは説明があったし、アンケートも届いて分析もしていたが、決定の過程が不明瞭だ。第一討議はなかった。反対意見はいつ言えただろうか。この決定は会員の総意だろうか。こう考えるのはケチをつけたがっているのだろうか。よくわからない。

しかし「山荘建設便り」はあまりにも品がない。私は山岳会のお陰を最も被っている一人であって、恥ずかしながら愛着は深いが、この文面には悲しくなってしまった。寄付された53名以外の会員はどう感じただろうか。けれど言葉尻をつかまえてどうこう言うのは止めにしよう。

すでにゴーサインが出てしまっている以上、反対意見は空振りするだけだが、私の最も懸念する点は、山荘建設後の会のあり方だ。反対し、寄付をしない以上、山荘を利用しないことは仁義であって、定款にその文言を書く必要もない。蛇足に靴をはかすようなものだ。だけど、例えば山荘で幹事会をやらうとしたり、ランタンリルン50周年をやらうとしたりする時、困ることが起きるだろう。言葉に出さなくても、溝ができてしまうのは止めようもない。せっかくの会の親睦目的が反対に作用する可能性が大きい。

特に沈黙の若手の山岳会離れが怖い。50才に近づきつつある私が自称若手というのが空恐ろしい会の高齢化の証であって、山の夢もとうの昔に消えている。この山荘がサロンの舞台であることはなんら不思議ではないし、それはそれで楽しくすてきだ。しかし、そんなことより、反対し、寄付しない私のような者が、なにか総会にも顔を出しづらくなり、山岳会を離れたくなるような気分にはさせないで欲しい。

だから提案。

山荘の所有は会員有志にしたらどうだろうか。
これなら今からでもすぐにできる。計画を変更せずともよいし、寄付も生きる。どうしても山岳会
の名前が欲しいのであれば、山岳会公認山荘の名
前ぐらいは使ってもらっても文句はない。

高津小屋で楽しませていただいたから山小屋の
快楽について、私の拙い詩のようなカッコイイひ
とりよがりには確かに小児病的かもしれない。けれ
ども私にはそう言うしかなく、車で食材を買いに
行くような山荘が、アルパイン・クラブにふさわ
しいはずがない。

第10条メンバーに関して、「寄付した者に限定
する」を支持する。それはすなわち、会員有志を
意味するからである。

私がもし90才ぐらいまで生きていたら、転向し
て、山荘メンバーズ会員権を購入し、山荘に入り
びたるかもしれないので、このような反対意見が
私一人であることを望む。☞



編集後記

- ・山の記録が少ないのがさびしいですね。山はいつも私たちを待っているような気がします。会いにいきませんか。雪の季節になりますし。
- ・いいわけをするわけではないけれど、小屋の決定は幹事会でしたわけではありません。知らない間に決まっていました。
- ・引っ越しました。心機一転のつもりでいます。こちらの水は地下水が半分以上入っているそうで大阪市内の水とは比べものになりません。一度お茶でも飲みに行ってください。【む】

大阪市立大学山岳会発行
会長：池永薫爾
編集：総務幹事 矢倉睦

